

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長
荒谷 卓

生死をかける目的意識の確立

自衛隊の南スーダンへの派遣が本格化しているが、同国への派遣が決まった隊員たちの中に、「今回の南スーダンの派遣には、日本の国益という観点からどのような意味があるのだろうか」「果たして自衛官として生死をかけてまでこの任務に就く意味があるのだろうか」との疑問を抱かずにおれない者が少なからずいる。

これは過去の海外派遣についても言えることだが、相変わらず日本政府としての主体的な意志、すなわち日本と

して何をしたいのかがまったく不明確なまま、目的の曖昧な任務が付与されているからである。

いつものように外務省が主導して、「先進国は皆やっていることだから、日本だけが何もしないわけにはいかない」程度の認識でやられているのであれば、自衛官がリスクを冒し、財政逼迫時の予算を使ってまで遂行すべき任務とは言いがたい。

それどころか外圧の下、日本以外の別の国、あるいは市場の利益に適うような任務であれば、その任務に参加することが日本以外の別の国、あるいは

市場を利用するだけの意味しか持たないことさえあり得る。

だから、こうした疑問を抱いている隊員には、個々の隊員たちがそもそも何を目的に自衛官になろうとしたのか、自分は、人生を通じてどんなことを成し遂げたいのかという志の原点に立ち戻るように助言している。そして、南スーダンの現状や過去の歴史を、与えられた情報だけではなく自ら学び、自分の志と照らし合わせた上で、判断するようにと話している。

その上で、やると判断したならば、自分の志に沿って任務に全力を尽くし

ている。もちろん、その場合は、退官を覚悟する必要がある。

よく軍人はどんな命令であろうと忠実であると言われるが、現代においては、個々の軍人が盲目的に上官の命令に従ってさえすればいいとは限らない。今日のように軍隊が多様な役割のために運用される時代にあつては、その背景にある政治的環境や利害関係などによって運用目的もその都度違ってくるからである。

さらに日本の場合には、必ずしも国家としての主体的な意志の下で運用される保証もない。安全保障と国防に関して、戦後日本政府が主体的に判断し行動したことなどないからだ。そうした中では、各自が二つの任務を自身で調査分析し、「これが自分や部下・同僚の生死をかける意味のあることなのかどうか」「富める者の財産獲得の一端を担がされているのではないか」「正しい弱者を殺傷することにはならないか」等をしつかりと分析し決断する必要がある。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」の真の意味

これを武士道の世界の「忠」という概念を使って考えてみよう。かつての武士たちは武家の棟梁に「忠」を誓って仕えていた訳だが、これは決して盲目的に主の命令に従うということの意味しない。「忠に生きる」とは、自分の志を表現

してくれると自ら信じるリーダーの下に馳せ参じて、そのリーダーの活動に参画することで自らの志を達成しようという主体的な営みである。それは親分に服従し言われたことは何でもやるという奴隷的な意味ではなく、自分の志が遂げられると確信できるリーダーの下で、自己の自立した精神を保つまま、自ら選択して選んだ道を進むことを意味したのである。

業隠の有名な「武士道とは死ぬこととみつけたり」という言葉も、この文脈で解釈されなければならない。これは、「生きるか死ぬか」という二者択一の場に遭遇したならば、「死を選べ」ということなのだが、それには前提があつて、自分の志を主体的に探究し、自らのリーダーの下で忠に生きた結果として、そのような生死の境に遭遇したならば、という条件付きの言葉である。

こうした特定の下で、自らが探求した志の結果として生死の場面に直面したならば、そこで生を選べば、自らが探求してきた志を放棄することになる。だから、たとえ生死の問題に直面しても、志の方を貫徹せよ、精神を優先させるために死を選べという意味である。平民であれば、生死の問題に行きつく前に意志を曲げてしまうことが多いが、武士である以上、生死の問題に行きついてまで貫き通す志があるのかどうか、そうした志を完遂する気概を保持しているかどうかを常に問う、それが武士道的な生き方なのである。

「切腹」もまったく同じロジックで理解されなくてはならない。これは自分の現実的な地位や境遇ではこれ以上自分の意志を貫徹することができない場合に、精神の自由を保持するために自らの肉体に付随する境遇を断つ以外にはない、という判断の下に、肉体の終了を迎えるという意味である。自分の意志を貫く。本来ならば肉体を通じて達成しようと思つた志を最後まで曲げずに貫くためには肉体を破壊しなければならぬという状況下で、志を優先させるといふ点に意味があるのである。

これは死ぬば天国に行けるとか救いが得られるという事とは全く次元の違う世界観だ。何か死んだ後にいいことがあるからということではなく、純粹に現在の自分の意志を貫くということだけなのである。

武士道精神の発揚こそが日本再生の道

こうした日本人の精神性は、神道的な価値観に根差したものだと考えられる。禅や儒教の倫理観の対象は個人なのだが、神道には「個」という概念がない。物の誕生から宇宙も集合体として生成し、人類も集合体として生成・発展したと解釈されている。だから道徳、倫理も個人ではなく社会が基本となっている。

ここには個人、すなわち自分が息絶えてもそれは全体の集合体の中で個

に過ぎない。だから個としては達成されなかつた志も、集合体として、全体としていつかは達成されると考える余地を産むのであろう。個人の肉体が消滅しても、精神や志さえ貫けば、誰かがその精神を継承し、いつかは皆が実現してくれるという精神的感覚が、日本人の潜在意識の中にあるのだと考えられる。

社会全体の共有意志の中で自分の志が引き継がれていく、そういう安心感の中で、自身の肉体の消滅を悲観視しない、そうした考え方が武士道の中に根づいていったのだらう。

かつて武士という階級の存在した時代には、武士たちはこうした精神を共有していたのだろうが、それは武士に限らず町民や農民を問わず多くの人の中に、共有されていたのだと思われる。そしてそれは薄まりながらも現代の多くの日本人の中にも、精神文化として生き続けている。東日本大震災で見たものがまさにそうした現実である。

「個人」を起源として考える発想から、「社会」を起源として考える発想に立ち戻る。さらに、「人は社会の中に生まれる細胞のような役割」、そして、「過去と未来の連接の中の存在」と考えれば、歴史的かつ社会的に全体の活動を進歩発展させることこそ、日本の伝統的思想である。